
忠告

岩瀬馨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忠告

【Nコード】

N6740V

【作者名】

岩瀬馨

【あらすじ】

主人公は一人暮らしの会社員。普段のようにパソコンを立ち上げると、そこにはなにやら見慣れぬアイコンが……。

「ただいま」

誰もいないことはわかっている。だが、一人暮らしを始めてからというもの、ただなんとなく、空っぽの部屋に向かってそう声を掛けてしまう。

認めたくは無いが、俺自身、一人暮らしという孤独な状況が耐え難く、こうして「ただいま」と声を掛けることによって、寂しさを紛らわそうとしているのだろう。家を飛び出したときは、ただひたすらに両親から離れたい、その一心であった。

親父は毎日飲み歩き、母さんはそんな父に気を使いすぎてやつれてゆく。俺がどれほど言っても、親父も母さんも聞きやしない。まるで漫画かアニメで出て来るような模範的ともいえる”ワケあり家庭”だったが故に、飛び出したところで何の寂しさも感じないものだと思っていた。

とはいえ、現実が見えてくるのは、実際にその現実に向き合った後だ。事前の予測は所詮は想像にすぎない。一人で過ごす夜の不安さ、そして鍵を開けたときに眼前に広がる沈黙と閉塞のみが満たす部屋の風景は、常に家に誰かがいる環境にあった者が体験するには少々寂し過ぎる環境であることを知ったのは、一人暮らしを始めて1週間も経った後のことであった。それに加えて、日付が変わる寸前まで続く仕事……、そんな生活が、もう4年もの間繰り返されていく。正直、体が持たないし、どうにもこの寂しさは、いつまで経っても慣れないものだ。

しかし、そんな弱音を吐いていては、大口を叩いて家を飛び出した自分自身が情けなくて仕方が無い。俺は冷蔵庫を開けて缶チューハイを取り出し、一気に飲み干した。

一人暮らしの楽しみといえば、食べることに、寝ること、そして後は、パソコンで動画サイトを見て回ることくらいだ。俺はいつものようにパソコンの前に座り、スタンバイ状態のままにしてあるパソコンの電源ボタンを押す。

普段どおりにパソコンは立ち上がった。だが、そこになにやら、見慣れぬアイコンが1つ、デスクトップに表示されていた。

「……ん？」

アイコンの絵柄は、単なる丸だった。影が付けられているわけでもなく、ただ真っ白に塗りつぶされた丸だった。

「何だよ、これ……？」

昨日飲み過ぎて、知らず知らずのうちに何か得体の知れないソフトウェアをインストールしてしまったのか。記憶を手繰るが、そんな記憶は出てこない。いや、そもそも、昨日の夜の記憶なんて無い。

「何なんだ……？」 第一、アイコンってのはこう、ピクトグラムかロゴマークだろう？」

誰に突っ込むわけでもなくそう呟いてしまう。だが、実際そうだろう。インターネット、ごみ箱、フォルダー……、大体のアイコンはそれを見れば何なのかくらいは判る。一方でこれはどうだ。単なる白い丸でしかない。さらに奇妙なことに、一般的にアイコンの下に表示されるタイトル、これも一切無いのだ。

「……」

クリックしてみれば謎は解けるのだろう。しかし俺はそれを躊躇せざるを得なかった。それというのも、こういったモノをうかつにクリックすると、変なサイトに導かれて法外な料金を請求されるだの、ウイルスに感染してパソコンが再起不能になるだの、ろくなことにならないのはネット上を歩く人間の常識だ。

だが、削除することも出来なかった。別にファイルが削除不可になっているわけではない。ただどういうわけか、アイコンをドラッグしてごみ箱に放り込む、その行動がどうしても出来なかった。

俺はどうすることも出来ず、とりあえずパソコンの電源を落とした。

あれから1週間。例の謎のアイコンは、ずっと俺のパソコンのデスクトップに居座っている。それだけではない。そのアイコン、日が経つにつれ、白かった丸はだんだんと黒味がかってきているのだ。俺はさすがに削除しようとした。だが、どうしてもそれが出来なかった。どういうわけか、削除しようとするのと別のソフトが立ち上がり、削除するという行動の邪魔をする。ついには、その丸は自身を消すことを自ら拒み始めたのだ。流石に気味が悪くなり、ウィルスチェックに掛けてみても何ら異常は発見されなかった。そしてその翌日、丸は完全な黒となった。

今日もまた、謎の丸の正体を掴む勇氣も無いまま、時間だけが過ぎていく。と、その時。

——ジリリリリリリッ——！！

昭和を感じさせる黒電話の着信音が、俺の携帯からけたたましく響いた。時刻は既に深夜の2時。この時間に来る電話が良い知らせであった例がない。俺は不安を感じながらも、机の上で震えながら動き回る携帯電話を掴む。

ディスプレイには、「非通知」とあった。

「……はい、もしもし？」

電話の通話ボタンを押すが、返事は無い。

「……………もしもし？」

苛立ちながら、俺はもう一度問いかける。やはり返事は無い。

「何だよ……、いたずら電話か!？」

いらぬ不安を煽られ、俺はつい声を荒げる。携帯を耳から離し、終話ボタンに手を乗せる。

『……………を……………き……………』

「え？」

電話からかすかな声が聞こえた。俺は慌てて携帯電話を耳に強く押し当てる。

『……………』

受話音を大きくする。しかし、先ほどのような声は聞こえてこない。だが、先ほどもまでは確実に何かが違う。電話の向こうに、何らかの気配を感じる。電話をしている最中、話題が途切れ、しばしの沈黙が訪れた時のように、電話の向こうには明らかに何かがいる。

「……………おい……………」

電話口の気配に呼びかける。…………と、次の瞬間。

『——忠告を聞けッ!』

先ほどのごく小さな声とは明らかに違う、野太い男の声が、携帯から出るとは思えない凄まじい音量で響いた。

「な……………ッ……………」

俺はその衝撃に、携帯を手から落としてしまう。画面には通話時間が表示され、通話が切られたことを示していた。

「……………忠告？」

俺は慌ててパソコンをつける。

「……………なっ……………」

デスクトップ上にあった黒い丸。それはまた色を変え、今度は赤い、血のような、炎のような、そんな不気味な色の丸に変わっていた。

俺は不安だの不気味だのそんなことを考える暇も無く、すぐにそ

の赤い丸をダブルクリックした。

赤い丸の正体は、動画ファイルだった。しばらく黒い画面が続いていたが、突如画面が明るくなり、そこに、見覚えのある風景が写し出された。

「……俺!？」

そこに移っていたのは、いつも通りにパソコンに向かう俺だった。位置からして、パソコンのモニタの上に取り付けられたウェブカメラによる映像であろう。

問題はその内容だ。何かの拍子に間違っただけの録画したものでないことは明らかなのだ。それというのも、画面の中の俺が着ている洋服、それは、今日の帰り道に俺が買ってきて、ついさっき着替えたばかりの服なのだ。

俺はモニタの中の俺をじっと見据える。モニタの中の俺は、画面を注視している。……ちょうど、今の俺と同じように。

時間ばかりがどんどん経過していく。と、その時、画面の中にある時計に目がいく。その時計が指している時刻は、今、俺がこうして見ている今、この瞬間とまったく同じ時刻であった。

背筋が凍る。さっきの電話から推測するに、これは、何かの警告なのだ。だが、動画の中の時間と、今、こうしてそれを見ている時間がまったく同じということは、この動画の中の存在に何かが起こっても、俺は逃げようがないということを示していた。

逃げなければならない、俺はそう悟った。

鍵も掛けずに、慌てて俺は外へと飛び出す。階段を駆け下り、家の前の道路へと飛び出した俺は我が目を疑った。一階の、ちょうど俺の真下の部屋。そこから、煙が上がっているのだ。

「……か、か、火事だッ！！！」

俺は大声で叫ぶ。

「火事だッ！ 火事だぁッ！！！」

必死に叫び続ける。周囲の家から誰かが出てくる気配は無い。そのうちに、俺の声が届いたのか、目の前の一軒家に住んでいる女性がいかに眠そうな目をしながら外へ出てきた。

「何ー……？」

「あ、か、火事です！ 消防を……」

そう言いかけた次の瞬間、ガラス窓を突き破って外へと出てきた炎が、ガスボンベに引火し大爆発を起こす。木造2階建てのアパートは、瞬く間に炎に包まれていった。

爆音で目を覚ました近隣住民が家を飛び出してくる中、俺はただ呆然とその場にへたり込んでいた。もし、あの動画を最後まで見ていたなら……。おそらく今、画面の中の俺は炎に包まれていることだろう。

家も、金も、全てを失った俺は、一度実家に戻ることにした。

火事の翌朝、何とか交通費だけを近所の人に工面してもらい、俺は電車で2時間離れた実家へと帰った。そこで俺を待ち受けていたのは、病院でずっと意識不明だった親父が、昨日の夜亡くなったという知らせであった。その時間は、俺の携帯に電話がかかってきた時間と完全に一致していた。そして意識不明になった日は、俺のパソコンにあの得体の知れないアイコンが表示された日、これも一致していた。

母さんは俺に対する連絡が遅れたことを詫びつつも、親父の死に対して何も感じてはいない様子だった。しばらく見ていなかった母

さんは、親父に振り回され続けた所為だろうか、俺が一人暮らしを始める前よりもだいぶやつれてしまっていた。

あれは、親父が俺の身を案じて残したメッセージだったのか。真偽のほどは判らない。とはいえ、あの電話が無ければ、きっと俺はあのファイルを開かず、あのまま炎に飲まれていた事だろう。

息子に父親らしいことを一つもしてやれなかった駄目親父が、最後の最後に息子の命を救ってくれた、俺はそう考えている。だった——。

「母さん」

縁側で花を見ながら座り込んでいる母さんに、俺は後ろから声を掛けた。

「どうしたの？」

「……俺、こっちで働くことにするよ」

母は俺の申し出に、特には反応を示さなかった。だが、母さんの後姿から、その表情が笑顔であるということだけはなんとなく感じられた。

親父は駄目な奴だったけど、内心では、きっと俺達のことを案じてくれていただろうし、母さんにも俺にも、いろいろと迷惑を掛けてしまっていたという後悔はあったんだろうと思う。だが、不器用ゆえに、母さんに対して何もしてやれなかったんだろう。

俺はどうなのか。やつれていく母さんと自分では何もできやしなかった親父を捨て、一人東京へと出て行ったのは、親不孝ではなかったのか。

だからこそ、俺はこっちで働いて、母さんのそばにいてやることにした。それが、命を救ってくれた親父に、そして、何も言わずに

俺のワガママを許してくれた母さんに対する、せめてもの恩返しになると、そう感じたから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6740v/>

忠告

2011年8月11日01時48分発行